（別紙 2）

審査の結果の要旨

氏名　櫛原　克哉

本論文は外来精神医療の患者を対象に、これを「自己の医療化」の観点から分析することを目的とする。日常生活で生じる心身の違和感や苦悩などのトラブルのうち、何が外来精神医療に持ち込まれ、いかなる治療や対処がなされ、それらが自己にもたらす帰結は何かを、精神科や心療内科に通院経験のある 31 名のインタビューをもとに分析している。

第１章では、20 世紀初頭から近年までの外来精神医療の形成の歴史をまとめている。第２・３章では、医療化論の先行研究を広範に検討しつつ「自己の医療化」の語りを分析する手法として、ナラティヴ・ディスコース・アプローチを導入している。

第４章では、外来精神医療がその間口の広さゆえに、持ち込まれるトラブルも雑多な内容を有し、患者も、自己の病因を医療用語で語る「医療化のディスコース」と、医療化を批判する「医療化批判のディコース」が併存する状態に陥る様相が分析される。本論文はこれを「不安定な医療化」となづけている。

第５章では、薬物療法に関する語りが分析される。自己との関係では、薬物療法が人格や性格に侵襲的に作用し、薬への依存が生じるとする「依存のディスコース」が顕著であるが、薬物療法は対症療法にすぎず、精神的な問題の根本に到達できないとする「対症療法のディスコース」も併存する。総じて薬物療法のみではトラブルは解消困難とされ、薬物療法以外の治療へと向かう様相が分析されている。第６章では、実践的な対処法とされる認知行動療法について、認知や行動の具体的な対象に定位し続けることの困難を語るディスコースの存在が指摘される。認知や行動の発生源として性格が言及されるとき、より「根本的」な療法が志向されるが、それも日常生活で実践・継続するには困難が伴い、実践的な課題解決型アプローチへと回帰せざるをえない困難が分析されている。

第７・８章では、外来精神医療の治療がいつ終了するのかについての語りを分析した。「いつの間にか通院しなくなった」という語り、「そもそも自身は病であるのか、何が正しい診断なのか」という問いかけ、「対人・親子関係によって生じたトラブルは人間関係の清算によって解決される」とする語りが混在している。外来精神医療は、門戸が広く開かれているゆえに、種々の価値観や方向性を有した医療化が錯綜する場となる。それは医療への期待を増幅させる一方、医療化が十分になされず、自己診断の結果が医師から承認されないことで、患者の不満や失望が高まるというジレンマもある。本論文はこれを「不安定な医療化」がもたらす帰結として論じている。

本論文は、患者が自己をいかに解釈し、意味づけるかを丁寧に類型化しながら、そうした自己理解がもたらす帰結の分析に成功している。患者以外へのインタビューがあれば、より立体的に議論を展開しうる余地はあるが、不安定な医療化の実態を適切に捉えた本論文は、自己論と医療化論を架橋し、その双方に大きな理論的、実証的貢献をなす論考である。

よって本審査委員会は、博士（社会学）の学位を授与するにふさわしいと判断した。